

まだ、また遅刻だ。今週二度目だ！事務所にダッシュで向かう。

「今日はやばい...」

スマホの充電を忘れていた。アラームが鳴らなかった。前回はメンバーに深く深いそれはそれは深い土下座をしてなんとか許しを得た。今日はもうそれじゃあ通用しないだろう。真夏にダッシュで汗やらなんやらでぐちゃぐちゃだがそんなことは気にせずとにかく走り続けた。

絶賛遅刻中の彼女は地下アイドルグループ”Vise“のメンバー“高橋エリカ”だ。Viseはエリカと”Mico“・”佐川由利“・”Licachi“・”Shana“・”加藤桜“の6人で構成されるアイドルユニットである。アイドル業のかたわら人気SNSのUtubeで動画投稿やライブ配信を行う、いわゆる”Utuber”としても活動もしていた。動画の内容はグループのMVからドッキリ企画など様々であった。今日はViseのUtuberとしての活動の日で、口ケを行い一日をかけて動画撮影をするという予定であった。そのためにスケジュールが分単位で詰まっており、メンバーをはじめスタッフ陣も特に今日は気合いを入れて臨んでいた。そんな日にエリカは遅刻をしたのだ。しかも今週二度目の遅刻である。事務所でエリカを待つメンバー・スタッフは怒りを通り越し、もはやエリカにどのように償わせるかの議論をするところにまで到っていた。

「すみませんでしたっっ！！！！！」

エリカはスライディング土下座で事務所に突っ込んだ。

「もうそれ見飽きたんだけど？」

「ってかやっぱ反省してないよね？」

「土下座ばっか上手くなってるね」

メンバーからもスタッフからも散々な言われようだが、エリカはもう謝ることしかできなかった。

「本当にすみません...」

「わかったから、とりあえず顔上げな」

エリカは顔を上げると、既にカメラが回っており動画撮影中だということに気づいた。

「はい！ということで、スライディング土下座で登場したこの高橋エリカちゃんは遅刻をしてみんなに大迷惑をかけました！」

「だからエリカにはそれ相応の罰を与えたいと思います！」

エリカはカメラの前に座られ、なにやら不気味な笑みを浮かべるメンバーたちに囲まれていた。

「えっ、罰？ってどういう…」

「さて！エリカに受けてもらう罰はこちらです！」

と言うと、エリカはいきなりメンバーにもみくちゃにされ、服やアクセサリーなど全てを剥ぎ取られ、一糸纏わぬ姿にされてしまった。

「待って！どういうこと？！」

エリカは両手で体を覆いパニックになっていると

「ということで、今日エリカには一日中その格好で過ごしてもらいます！」

「…え？…で、でも今日って口ケだしs

「もちろん！全裸で口ケにも行ってもらいます！」

「さあっ！しゅっぱーっつ！！！」

エリカはメンバーに話を遮られ、そして手を引かれ抵抗することもできずあっという間に外に連れ出されてしまった。当然だが彼女だけ全裸である。

しかも靴も履いていない完全な裸である。今日は口ケなのでスタッフも機材を運びカメラを回しながらついてくる。服も靴も事務所に置いたままのエリカは本当にただ一人だけ全裸であった。駐車場にある移動用のバンに向かい手を引かれ連れて行かれる間もアスファルトを裸足で叩くその感覚が、自分は今“完全に裸”で“外にいる”ということを意識させる。遅刻したとはいえ、まだ朝だったこともあり照り返しの熱さなどはそこまで気にならなかったが、服を着たメンバーやスタッフと一緒に一人だけ全裸で外にいるというのはただただ恥ずかしくエリカは顔から火が出そうだった。

さあ、エリカの長い一日が始まる。それも一人だけ全裸の一日が。

「今日猛暑日だって～」

「アプリの太陽のマークなんか真っ赤なんだけどやばくない？」

「バグってんじゃない？」

移動用バンに乗り込んだエリカとメンバー、スタッフは一旦カメラを止めて軽い打合せや雑談をしていた。当然だが、この間もエリカは一人だけ全裸である。(タオルくらいれてもいいのに...)と思いながらも、これは遅刻をした自分が悪いのだと思い返し甘んじてこの状況を受け入れた。

さて今日の口ケなのだが、最初は区の体育館を貸し切って行う“メンバー対抗体力測定”であった。ということで今は体育館に向かっているのだが、ここで一つ問題があった。それは“全裸での撮影許可”である。そこで、あるスタッフが区の担当者に掛け合っていた。そのスタッフというのは、“ネゴシエーター”というあだ名で呼ばれる驚異的な交渉力の持ち主であり、巧みな話術・人心掌握術で少々無理がある企画も通してしまうというので業界でも一目置かれる存在だった。そういうわけで、そのスタッフは当然のように“全裸撮影”的許可を取ってしまった。メンバーもスタッフも企画の失敗を免れたことに安堵し再び細かい打ち合わせを始めたが、エリカは少し複雑な心境だった。なぜなら全裸なのはエリカだけだからである。しかも体力測定を全裸でやるということが確定したのである。(靴くらい履かせてくればいいのに...)そんなことを思っていると、車は体育館へ到着した。

エリカの遅刻で体育館使用できる時間もかなり限られたものになってしまっていた。メンバーとスタッフはそそくさと車を降り、機材を持って駐車場から体育館へと入って行く。エリカも遅れないようその後ろをついて行く。もちろん全裸で。段々と陽も強くなり、それに熱されたアスファルトの上を裸足で行くのは少し怖かったが、そんなことを言っている場合でもないのでただただ急いで体育館に向かった。

体育館の受付には先ほど“ネゴシエーター”に電話で対応した職員が待っていた。

「先ほどは無理を言ってすみませんでした。許可をいただけたことに感謝いたします。」

「いえいえ、こちらこそ面白い企画だなと思いまして、それが区の宣伝にもなればと思っております！」

(どんな交渉をしたのか知らないけど、“全裸撮影”が区の宣伝になんてなるのか?)とエリカが疑問に思ったことは言うまでもないが、区の職員はこの企画をかなり前向きに受け入れてくれたようだ。と、そのとき職員が皆の後ろに立っているエリカに気づいた。

「あれ？！もう全裸なんですか？」

「あ、これはですね、なんというか話すと長くなる事情がございまして…まあ、そのお、彼女が全裸だから許可が必要になったということでもあります…」

「なるほど…つまり、彼女が全裸なことがネックだっただけで、特に過激なことは行わないということですか？」

「はい！先ほども電話でお伝えさせていただきましたが、過激な撮影のために全裸になるとのではありません。だからこそおもしろい企画を撮って区の宣伝にも貢献できればなと！」

「そういうことでしたか！やはり少々不安な点もあったのですが、これで一安心です！じゃあ、全裸なのは彼女だけなんですね？」

「はい！ そうです！」

「おもしろい撮影になりそうですね！ 事情はわかりませんが、全裸の方も頑張ってください！ 応援してます！」

エリカは自分一人だけが全裸でいるということをこれでもかと強調され、職員の応援に対してもただ顔を赤くして会釈することしかできなかった。受付を終え体育館に入ると、スタッフは機材のセッティング、メンバーはジャージへの着替えを行った。その間エリカはだだっ広い体育館にただ全裸で立っていた。メンバーが各々メンバーカラーの長袖長ズボンのジャージを着てロッカールームから出でてくると、ちょうど機材のセッティングも完了し、いよいよ撮影開始となった。

「さて！ 今日は“メンバー対抗体力測定”をやっていきたいと思います！！！」

メンバーもスタッフも声を張り上げてオープニングを盛り上げる。エリカは全裸で胸の前で小さく拍手をして微力ながら盛り上げようと一応の努力はした。

「今日はね、動画の冒頭であったと思いますが、エリカが一日全裸の刑ということで。ここでも当然全裸で体力測定してもらいます！」

「動きやすくてむしろいいんじゃない？」

「え～全裸する～い！」

全裸いじりをされたエリカは「う、うるさいなっ。は、はやくやろうよっ」とボソボソと返したが、思ったより声が出ず、メンバーに届いているのかいないのかわからなかった。

「まずは、こちら定番の握力から測っていこうかなと思います！」
「うわあ、中学のとき12しかなかったわあ」

「それ大分キツくない？！ あたしのビリはなくなったかも」

最初は握力測定だ。(こんな広い体育館でいきなり握力かよ)とエリカは思ったが、この空間で一人だけ全裸で握力を測る姿を想像するとなんとも言えない気持ちになった。

「はい！それじゃあ最初はエリカ！」

「え…わ、わかったよ…」

「きた～！全裸で握力測るのってなんかシユールじゃね？笑」

ここでエリカは気づいた。それは握力の正しい測定姿勢についてである。両手を体の横にぴったりとつけ、脚は肩幅くらいに開く。たしかそんな感じだったはずだ。つまりは気をつけのような姿勢を強制されるのだ。一応エリカは両手をへその下辺りで組み胸と股間を最低限隠せるような姿勢で立っていた。ただ、この握力測定では完全にオープンすることになる。まあここまで来れば正直どうでもよくなっちゃうのだが、少し恥ずかしいなと思ったエリカであった。

「よし！じゃあ次は50m走です！！」

握力測定はまあ言ってしまえば画が地味なのでそこまでの盛り上がりもなく、ささっと終わってしまった。そして、次は50m走だった。(裸足で50mはちょっと足の裏が痛くなりそうだなあ。靴だけでも欲しいなあ)などとエリカは思った。

「じゃあ1人ずつ測ります！まずは全裸の人から！」

「いけー！エリカがんばれー！」

「これは全裸のほうがいい記録出せそう！」

エリカは走った。全裸で。体育館の床を裸足で叩く“ペタンッ！ペタンッ！”という音が響き渡った。

「色んなとこが揺れに揺れてんの笑う！！」

「足音ヤバい！」

「エリカほんとサイコー！」

弱冷房の体育館の中、50mを走り終え汗を滴らせながら全裸のエリカはジャージ姿のメンバーたちの元に息を整えながら歩いた。確かに全裸だからなのか、タイムは良かった。足の裏もそこまで痛くなかった。ただ、体育館に響き渡ったエリカの足音はエリカ自身の耳に残り、自分が歩く度にペタペタと鳴る足音が“今自分は全裸なんだ”ということを強調させ、自らの一歩一歩が己の羞恥心を刺激するものになってしまった。

体力測定は順調に進んだ。最後はここまで対決の順位を考慮して分けたチームでリレーを行うことになった。

「はい！最後はリレー対決です！チーム名とか決める？」

「じゃあこっちは“全員服着てますよチーム”でいいや」

「じゃあこっちは”一人だけ全裸の人がいますよチーム”で」

「適當かよ！」

「おっけおっけ！じゃあ“全員服着てますよチーム”対”一人だけ全裸の人がいますよチーム”でリレー対決やっていきます！」

もちろん、エリカは”一人だけ全裸の人がいますよチーム”であった。バトンが用意できなかったこともあり、タスキをリレーすることになっていた。(全裸にタスキってシュール過ぎない?)とエリカは思ったが、口には出さなかった。

「よーい...スタート！」

少しリードされた状態でアンカーのエリカにタスキが回ってきた。全裸にタスキだけの状態で追い上げるエリカ。裸足で体育館を走るあの独特の音、感覚がエリカの何か変な部分を刺激する。イケナイことをしている気分になる。いや、今はそんなことを考える状況じゃない。タスキが肩に胸に脇腹に汗で張り付く感覚も覚えながら、とにかく走った。

勝ったのは、”一人だけ全裸の人がいますよチーム“だった。エリカが速かった。ゴールをし、息を整えながらタスキを外し汗を手で拭うエリカにメンバーカラーのジャージを着たメンバーが祝福をしに駆け寄った。

「めっちゃヤバい！ エリカ最高だよ！」

「なんか今日めっちゃ調子良いんじゃない？！ 全裸だから？！」

「ずっと全裸のほうがパフォーマンス上がるんじゃない？ ライブも全裸で出なよ！」

体に擦れるメンバーのジャージの感覚がエリカが今いかに裸なのかということを思い出させ顔を赤くさせた。そういえば、エリカのメンバーカラーはヴァーガンディであった。

「ということで、”メンバー対抗体力測定“今回の優勝者は、エリカでした！！」

「エリカ最強！」

「全裸のほうが調子良くない？！」

「全裸になりたくてわざと遅刻したんじゃない？」

(いや、遅刻で全裸確定ってわけじゃないっしょ)とエリカは思ったが、少しテンションの上がっていた彼女は「そうだね！ みんなも全裸になっちゃう？」と返していた。

「ごめん！ 冗談！ 一日全裸の刑なんて誰も受けたくないでーす！」